

沖永良部における島妻慣行と女子教育の伝統 —奄美群島及び沖縄離島との比較研究—

中谷純江⁽¹⁾ 中嶋晋平⁽²⁾

(1) グローバルセンター（文化人類学）

(2) 「鹿児島近代」研究教育センター（歴史学）

研究の目的

沖永良部社会を重層的に捉えると、島妻慣行と女子教育の伝統（第4層）は下位の層に支えられている（図1）と同時に、社会を貫いて全ての層の中核をなしている（図2）と考えられる。本研究では、奄美群島の他の島や沖縄離島と比較を通して、第4層における相違が何に由来するのかを検討すること、また、核となる価値が異なることの社会的含意（他の層との関連）を考察することを目的とする。

図1

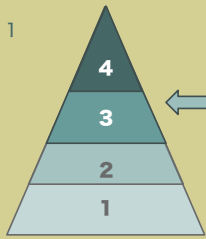
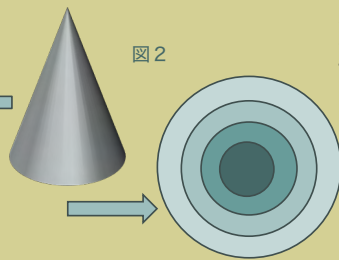


図2



- 1層：島嶼性・境界性
- 2層：双系的親族構造
- 3層：歴史（政治・経済）
- 4層：島妻・女子教育

研究内容

琉球支配の時代から薩摩藩直轄統治の時代を経て明治にいたるまで、エラブ社会の発展に尽力した指導者の多くが、琉球王府や薩摩藩から派遣された役人と島の女性との通婚から生まれた子孫であることはよく知られている。指導者たちについては、郷土史家により家譜や人物伝の調査が行われてきたが、彼らを産み育て一族の地位上昇の起点となった島妻本人については、あまり記録が残されていない。また、島妻慣行が、社会（政治・経済、ジェンダー等）にどのような影響を与えてきたのかについては論じられてこなかった。本研究で、島妻につながる家系の人々へ、女子のライフヒストリーや教育歴等についてインタビューを行った他、統計資料や人々の記憶や語りを集め、奄美群島の他の島や八重山諸島との比較を行った。

調査成果

<奄美群島間の比較>

- エラブでは、島妻を祖先にもつことや琉球・薩摩の血が入っていることへの評価が他の島々に比べて高く、公然と語られる。それに対し、例えば、喜界島ではどの家が島妻につながる家系なのかはあまり知られておらず、公には口にされない。
- エラブは教育熱心な島として知られ、幕末期の人口1万人あたりの塾の数は、鹿児島島の100倍、天領のあった大分や福岡と比べても2倍以上だった（表1）。また、明治大正期に師範学校を卒業した女性に注目すると、人口規模や産業構造が似ている喜界島の4倍以上であり（表2）、教員となって島の教育に尽力をした女性を多く輩出したことが明らかになった。
- エラブには、女学校や大学へ進学する女性が多くいた。昭和30年代にはお茶の水大学や神戸大学に行った優秀な女性（70-80代）もいた。「男子には土地を、女子には教育を与える」と祖父が語っていたのを覚えている男性（60代）によれば、彼の叔母は東京の大学まで行かせてもらったが、父や叔父は尋常小学校を出た後、シマで農業に従事したという。女子への教育を男子より重視していた事例さえもあった。

<八重山諸島との比較>

- 多良間島には「ウエーンマ（島妻）」像があり、島の文化として位置づけられている。地元民謡「多良間シュンカニ」では、島妻が子どもを連れて役人を迎える情景が謳われている。また、島妻につながる一族の墓は、一般の人々とは異なる立派なもので、島妻を起点に百姓から氏族へと地位を上昇させたことが家譜から示された。
- 竹富島にも島妻の大きな墓があり、「朝里屋ユンタ」節において島妻が歌われている。島妻を積極的に評価する時代があったことが伺われる一方、戦後、社会が父系化を強めるに従い、ネガティブな評価が加わり、歌の解釈も両義的な意味をもつように変化したことがわかった。

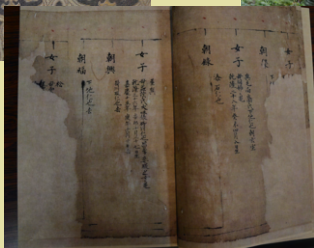
（表1）幕末頃の九州各県と沖永良部の塾の数 [玉起 1997:16]

	藩学	私学	寺子屋	計	人口（推定）	人口1万あたり塾の数
福岡	9	50	160	219	95万	2.2
大分	18	92	482	592	65万	9.1
佐賀	23	7	27	57	50万	1.1
長崎	7	51	188	246	100万	2.5
熊本	6	45	910	961	90万	10.7
宮崎	7	6	9	22	35万	0.6
鹿児島島	6	1	19	26	110万	0.2
沖永良部	0	30	0	30	1.3万	23.1

（表2）奄美群島における明治大正期の師範学校卒業生数 [玉起 1997:23]

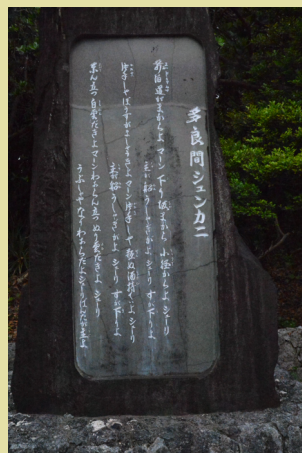
	1916年	本科1部		本科2部		講習科		合計		人口1万あたり	
	総人口	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
大島	10.2万	55	8	23	4	27	43	105	55	1.03	0.54
徳之島	5.5万	48	0	34	2	48	11	130	13	2.36	0.24
喜界島	2.1万	42	0	10	2	30	7	82	9	3.90	0.43
沖永良部	2.8万	66	19	18	6	45	31	129	56	4.56	2.00
与論	0.8万	10	0	1	1	8	3	19	4	2.32	0.50

出処：玉起寿芳(1997) 沖永良部と西郷南洲先生（私家版）



上：向裔氏親族墓
左：向裔氏系図家譜
右：ウエーンマ別離の像と「多良間シュンカニ」碑

（撮影 中谷純江）



考察・結論

沖永良部島では、女性に教育を与えることが特別に重視されてきた。その背景には、女性の教養や美貌が、家族や一族の社会的地位を上げる手段であるという認識があったと考えられる。島妻に選ばれるために、女性が踊りを披露したり、男性の心を動かす琉歌を読んだことが知られている。一方、他の島には、女性の美しさだけが強調され、役人に見染められて不幸になったという話も残されている。いづれにせよ、女性の人生が（教養ではなく）美貌によって左右されると考えていたことがわかる。また、八重山諸島においても、島妻慣行は近世を通して明治まで見られたが、島妻への評価が時代において変化し、著しく下がっていったことが明らかになった。これに対し、沖永良部では、近世の島妻への高い評価が近代における女子教育への熱意へとつながり、多くの女性が意志を持って自らの人生を切り開いていったことがライフヒストリー調査から明らかになった。沖永良部社会は、女性がエイジェンシーを発揮する空間が他に比して広いといえる。